論理とリズム

なだいなだ

気楽に聞いてください。話の題なんていうのは、少し大げさの方が印象が強いだろうと思って、苦し紛れに「論理とリズム」なんて偉そうなこと言っちゃったんですけれども、私たちの生活では、言葉でいろいろ自分の心の中にあるものを告げたり、自分が見てきたものを話したりします。つまりコミュニケーションについて話をしようと思うのです。

さて真実を伝えるのも言葉ですが、私たちは言葉でだまされたり言葉でだましたりもします。ですから男性の言葉を注意して聞かなきゃいけないですよ、女の子は。

またイタリアへ行って「あなたは私の太陽だ」と言われたらほめられているんだな、と喜んでいいかもしれないけれど、スペインに行ったら、ちょっと警戒しなければいけない。「じいっと見つめると目がつぶれる」というわけで、余りにもブスだという時に使うんだそうです。スペイン語の勉強したときにそういうことわざがあるのを知ったんです。つまり同じ言葉でも、そういうふうに意味が違ってくる。だから注意しなければいけない。

私なんかも、しゃべりでかなりごまかしてきました。医者の学校というのは筆記試験は余りやらない。学期末試験なんかみんな口頭試問なんです。解剖をしますね。そうすると先生は「ここにあるのは何だ」ときく。だから私たちは解剖するときにいろんなものを早々と切り取っちゃっておくんです。すると「ここにあったはずのものは何だ」（笑）という。私たちは、あったはずのもので自分の知っているものを「ここにはこれがありました」「バカッ。別なものがあったろう」なんて言われるけれども、それは知らんふりすればいいわけでしょう。

そういうところで、私もさんざんごまかしてきた。「ここには二本の神経が通っています」といってから、一本の神経の名は正確に早く言うんですね、二本目の神経の名は、もっと早く、同じことを二度言うのです。（笑）そうすると先生は「そのとおりッ」とか言って通してくれるんです。あなたがたはなかなかやれないだろうけれども、リズムというか気合いというか、間髪を入れずにサッと言えば、先生もまた「そのとおりッ」。

先生の中には、ちょっと調子のいい先生がいるんですね。生徒の言ったことをたちどころに「それは違うッ、それはいいッ」と言う

と、あの先生はかなりできると評判が上がるでしょう。だから「これはこれで、これはこれ」と生徒がやると、先生の方もとたんに「よろしいッ」と言ってくれるわけです。

それからこれは昔の試験の失敗談だけれども、フランス語でl'eau de puitsという単語が出たんです。puitsは井戸で、l'eauは水です。だから井戸の水というのが答えだったのです。ところがl'eauは水だとわかったけれど、puitsがわからない。それで前の男を一生懸命つっついて「puitsってのは何だ、puitsってのは何だ」。口は前を向いているでしょう。どうもよく聞きとれない。一番できるやつが前にいたんです。そいつが言ったとおりにしようと、みんな耳を澄ませて、後ろのやつが「井戸の水か、井戸の水か」と聞いたら、前のやつが「ズバリ」と答えたんです。そうしたら他の連中みんな「ズバリの水、ズバリの水」。(笑)これ、本当の話です。

「ズバリの水」なんてのも、授業で聞いたことなかったでしょう。だからおかしいなって考えてもいいはずなんだけれども、やはり試験の最中で緊張していたときでもあるし、何か口調がよかったんでしょう。「ズバリ」とはっきり聞えたんですね。そういうふうに、私たちは意外と論理的でない。よく感情的だなんて言いますけれども、感情というよりむしろリズム的といった方がいいかもしれませんね。つまり、踊るのは感情で踊るというよりも、太鼓たたいてうまくリズムを合わせると、自然に体が動いちゃうでしょう。そういうふうにコミュニケーションの手段としてリズムがあるのです。

たとえば、これから同じ作業をしようというときがあるでしょう。みなさんが綱引きをするときに、うまく引くためにはこうやった方がいいですよ、ああやったほうがいいんですよなんて言います。勝つこつは、みんな力を一時に合わせて、リズムよく引くんですよなんて、言葉で説明するでしょう。しかしそれはあんまり役に立たない。それより「ヨイショ、ヨイショ」というかけ声の方が人間をすっかりリズムに乗せて動かすことができる。

論理は三段論法だなんて言いますけれども、三段論法でごまかされることも非常に多い。ごまかされることが多かったのに三段論法が、なぜずっと続いてきたかというと、やはり三段の論理が三段のリズムになっているのがよかったんじゃないか。A、B、Cというリズムがとてもよかった、そのためではないかと思います。

私のような精神科の医者は患者さんの話を言葉で聞くわけでしょう。患者さんを説得するには言葉を使うわけでしょう。大体が言葉のやりとりでする。しかもかなり患者さんをごまかさなければいけないときがあるわけです。

江戸時代にも、そういうごまかしがありました。ある患者さんが五人の名医のうち四人まで見てもらった。腹の上のところが痛んで何かおかしい、治してくれというと、お医者さんが薬を出してくれるが、ちっとも治らない。患者さんがブツブツ文句を言いながら五番目のお医者さんのところにきた。お医者さんがどこが悪いんだねと言うと「ここが痛いけれども有名な偉い先生たちにかかっても治らない。あなが最後の五本の指に入る先生です。治らなかったら、世の中はヤブばかりだということになる」という。

その先生がいろいろ診察をして「あんた、ここだけ見ていたってだめだ。身体全体を見て診断する」といって足の裏のところに何かポツンと変なものがあったらしいのを「これがもしかしたらあなた

の命取りになるかもしれない、こっちの方が大切ですよ。だから毎日測りなさい。一週間ごとに測ってみて、ずんずん大きくなるようだったら大変で、すぐ足を全部切らなきゃならないことになるかもしれないから、三月くらいたったら、よく測って私のところにやってきなさい」と言ったのです。

三月たって患者さんがニコニコしてやって来て「あんたは大ヤブだ。足のおできなんかで命取りになるはずがない。私を脅かしましたね」と笑ったら、その先生が言ったのは「こっちの方の痛みはどうだった？」。

そっちの痛みは忘れていたんですね。「忘れるくらいなら大した病気じゃないだろう」。その患者さんは「なるほどそうだ。今まで何で大騒ぎしたんだろう」と感じて戻っていった。精神科の医者は江戸時代にはいなかったけれども、漢方のお医者さんが精神科医がよく使う手を使っていたわけです。

精神科の医者というのは、言葉を使うのだけれども、その私たちがだまされることがあるのです。私は、物書き半分、医者半分。本当は真面目に医者だけやっていればいいんだし、そうでなかったらもう少し文学の方にも力を入れればいいかもしれない。私はアル中の治療を専門にやってきた。ある時、朝日新聞主催の講演会へ行って北海道の札幌で話をしたことがありました。新聞社の人が私を紹介してくれて「この人は、そうは見えないけれども」と断り書きがついていましたが「アル中の専門家としては十本の指の中に入る名医です」と言われたのです。十本の指に入るなんてうれしくなって（俺も何だか知らないうちに大したものになったんだな、新聞社が言うんだから嘘じゃないだろう。新聞社は嘘つかないと言ってるんだから）と思ったのです。時々新聞は嘘をつくなんて攻撃するのだけれども、こういう時には本気にしちゃうんですね。

そして、でもちょっと自信がないから数えてみたんです。北海道には、札幌にだれそれがいただろう、室蘭にだれがいる。青森にもいた。仙台にもいる。東京にも二、三人いる。浜松にも一人、と数えていたら九人までいたんだけれども十番目くらいに私が入るんです。（俺は日本全国で十本の指に入るか。捨てたもんじゃない）とこう思ったんです。でもそのときふと考えちゃったんですね。十一番目はだれだったかなあと。すると私の次にはだれも来ないのです。（笑）アル中の専門医というのは当時十人しかいなかった。どんなことしたって十本の指に入るんです。（笑）新聞社は、嘘はついてないですよ。そういうふうに人間は数字でもごまかされるわけです。

数字ばかりではなくて、理論的にもうんとごまかされる場合があります。私はアル中の患者たちを治療してきたけれども、たとえば「アルコール中毒になるような人は意志が弱い」というのです。これは嘘じゃない。飲んじゃいけないんだ、と思うのだけれども、つい手が出て飲む。帰りに赤ちょうちんの前を通ると、なんとなく飲みたいなと手を出してしまうわけです。意志が弱いといえば意志が弱い。そうすると家族の人がみんな言うのです。「先生、アル中は意志が弱いからなるんでしょう」。「そうだね、意志が強いからなるっていうこともないだろうからね」。「だから私はうちの人に言ってるんですよ、意志を強くしてお酒を断ちなさいって」。みんなそれでいいと思うでしょう。

半分は嘘じゃないです。意志が弱いからアル中になったそこまで

は正しい。でも意志を強くするというのはどうやって強くするんですか。意志を強くしてというから、その人は意志を強くする方法を教えてやってるのかというと、そうじゃない。「意志を強く持ちなさい、意志を強く持ちなさい」というだけ、それで意志が強くなるなら、こんな簡単なことはありませんね。実はお酒をやめる意志を強くしてお酒をやめるんじゃない。お酒を三日間やめてみた。十日やめられた。ひと月やめられた。また失敗したけれどもこの次には三月やめよう。飲みたいお酒をがまんしてがまんして、こういうことを続けていく。それにともなって意志が強くなる。つまり意志を強くしてお酒をやめるんじゃなくて、お酒をやめようと努力することで少しずつ意志が強くなっていくというわけなんですね。

意志が弱いから意志を強くして酒をやめなさい、というのはおかしい。逆なだけにうまくいかない。しかし結構みんな同じようなことを言います。私はある小学校の先生達の研修会に行ったことがあります。「落ちこぼれをなくす教育法の研究」といって、東北のある名門校で研究をやったわけですが、先生が「昨年は平均点がこれ以下の者が何人いたのにことしは何人しかいません。ほとんど落第がいなくなって、みんな成績が上がった」と報告している。立派なものだなあと思って見てきました。そして終ってお開きになってからお酒を飲んでいる時に、そばに座った数学の先生が「だけどみんな落ちこぼれなくなったけれど、どうも個性がなくなった。そういう感じがするんです」。

そこで私はその先生に言ったんです、「個性がなくなったというけれども個性をなくす教育をやっていたわけじゃないのですか」と。そしたら「とんでもないです。私は常々生徒には個性を伸してもらいたいとそう思っている。その反対のことなんか考えたことありません」。それで私はその先生に「でもどうなんですか、みんなが落ちこぼれでなく平均的になったら目立たなくなっていくんじゃないですか。落ちこぼれだから目立つ人間もいるんじゃないですか」。先生にとっては、アイツは俺が教えても何も頭に入らなくて苦労したというと、卒業してからもずっと印象に残るわけでしょう。それもやはり個性という感じがするわけですね。ところが、先生は個性というものが良いものだと思っているらしいんです。だから個性を持ち個性を伸してもらいたいと言っていた。私は「先生、個性を伸す教育をやればよかったんじゃないですか」。「私は個性を伸す教育をやってきましたよ」という。「どういう教育でしたか」。「毎日毎日『君たち、個性を持て、個性を持て』と言ってきた」。

その先生は真面目なんですね。落ちこぼれをなくすための特殊研究をやってきたけれども、個性に関してはお説教しただけで「君たち、個性を持ちなさい個性を持ちなさい」と言ってきたわけです。「それだったら先生、数学の落ちこぼれをなくす教育なんて、やらなくてもいいじゃないですか。『個性を持ちなさい、個性を持ちなさい』と同じように、『数学を勉強しなさい、数学できるようになりなさい』と言っていれば、数学ができるようになっちゃうじゃないですか」。そうしたら、その先生もだんだんわかってきたようです。

個性についてはどうも誤解があるようです。私たちは個性はいいものだというふうに考えている。でも何のためにいいかというのを忘れているわけですね。みんな個性のある人間はすばらしいと思っているが、その個性はどういう点ですばらしいのかというかという

と、創造性を持って仕事をしている、その仕事の上で個性というのは大きな役割りを果たしているわけです。

ところが、個性を持ち過ぎるほど持った人を亭主に迎えたら、奥さんになる人は苦労しますよ。昔から個性を持った人というのは話の種になるような人たちですね。たとえば、私はよく南方熊楠（みなかたくまぐす）の話をするのですが、彼ほどの個性を持った人はいないでしょう。彼は喧嘩っ早いのも有名で、大英博物館に勤めていたときに同僚をブンなぐってクビになっちゃったり、ともかく武勇伝のある人です。日本に帰ってきて、キノコの研究をやってみたり、民俗学の方の大家だったり、いろんな仕事をした人ですが、文章を読んでも大変な人なんだということはわかります。

彼は健康のためにフンドシ一つで生活した。仕事をするにもそれが一番いいというわけです。すごい個性でしょう。和歌山で生活していたのだけれども、天皇陛下に御進講などをしなければならなくなったときに服を着たというんですね。しかし奥さんなんか大変だったでしょうね。いろいろな人がやってきても、ガラッと戸を開けてフンドシ一つでお客さんの前に出てこられたら、友だちも呼べないでしょう。息子さんもそれを気にして、精神科の病気になっちゃった。（笑）親父が変人だったので、それを苦にして息子さんが病気になったということで非常に責任を感じ、それまでは物書きなんかはきらいだ、文章をお金に替えて生活するなんてけしからぬ、と言っていた人なのですが、その息子さんの医療費をかせぎ出すために「新聞にも書くよ、雑誌にも書くよ」と言って自分の学問を一般にもわかるような文章で書いて発表するようになった。そのお蔭で南方熊楠の本というのが生まれてくるんだから、世の中不思議なめぐり合わせだと思うのです。

そういうふうにして文章を書くようになったときに、新聞社の人が原稿を取りに来たりする。そうするとほこりだらけのところでフンドシ一つで書いている。それを見て新聞記者は驚かない。先生はフンドシ一つでいるぞ、と言われているから驚かない。ある女の記者なんかもやって来て、「そこで待ちなさい」と言われた。ほこりだらけの中で待っているけれども、女性としては母性的な本能をくすぐられて掃除でもしてやりたい。「待っている間、掃除でもしてあげましょうか」と言うと、「またどうせ汚れるから構わぬ。ただ待っとれ」と言う。またしばらくいると、何か異様な鼻をつくにおいがする。「先生、においますね」と言うと先生が「うん、におうな」。「先生、このにおいのもとを私が探して片づけてあげましょう」。「まあやってみろ。やったって見つからぬぞ」。あたりを見回したら、自分の後ろのところにもどしたらしい跡があるのです。それを見てやっぱり女の人だから「これをきれいにしてあげます、これがにおいのもとですよ」。先生は平然として「君、論理的、学問的に言ってそれがにおうはずがない。それは君、三年前のものだ」。（笑）本当だか嘘だかしらないけれども、有名な逸話として書かれているのです。

そういう話を聞くと、個性というのはこういうものだなと思うんです。その個性ある人というのは一緒に住んでいる人たちにとっては大変ですよ。私たちはともかく自分の気持ちのいい方を主にして考えるから、個性のある人間とつき合うというのは、とてもつらいんです。私など若いころ物書き志願の個性豊かな友人がたくさんいましたから、その人たちとつき合うのは、大変むずかしいことだな

と思いました。私たちは世の中で偉くなってしまった人たちを見ていると、すべてをいいように解釈していくわけです。偉くなると逸話として取り上げていくけれども、私たちはそれをみんなプラスの読みものとして受け取っていく。けれども現実に生きているときはそうでもない。

どうしてそういう個性が守られていったかというと、それは回りの人たちが寛容だったから。「個性を持て、個性を持て」と回りが言ってきたからじゃない。個性を導き出すには「個性を持ちなさい」と言うのじゃなくて、天衣無縫なことをやってのける非常に面倒な人間がいるけれども、その人間に対して非常におおらかに、寛容に見過してくれる人が個性を伸してくれる人ということになります。ここがむずかしいところです。

個性の話ではもう一人有名な人を取り上げるのですけれども、わざと汚い話をするつもりはないんです。女性のファンが非常に多い人で、そのイメージを崩すために言うわけじゃないんですが、良寛和尚ですね。子供と一緒になってまりをついて遊んだなんて話が、子供の読み物の中では出てくるわけです。ところが彼の伝記を一番最初に書いた人は晩年を見取った尼さんなんですが、この尼さんの書いた伝記の中に彼の逸話が出てくるわけです。簡単な言葉でいえば彼は現代でいったらヒッピーみたいな人だったんです。親と仲が悪くて放浪して歩いて、そして庵をむすんで、働かない。托鉢してお米をもらって、野の草を摘んでおかゆを作っては食べた。

余り欲のない人で托鉢をして歩いてお米を何杯かもらうともういいなんて、よけいにもらわない。そして炊いたおかゆが余ると捨てないでおしょうゆの壺に保存食みたいにしてとっておく。人が遊びに来たりすると、お椀ですくって出してあげた。これもなかなおつなものですなんて言ってね。それをお客さんが食べようとすると、何か白いものが動いている。「これは何でしょうか」。「見たことありませんか、これは蛆というものです」。それで呼ばれた人はぎょっとする。「私もそんなに人は悪くない。蛆を食べろなんて言わない。だけれども見てごらんなさい。蛆でもちゃんと足があって、這って外へ出て行きますよ。ちょっと待っていれば外へ出て行っちゃう。いなくなったところで食べれば、箸でつまんで表に出す手間がかからない」。こういうところにお客に行けますか。

でもこの人をちゃんとお茶の会なんかに呼んでくれる人もあった。その席の話ですが、お茶が回ってきた。自分にお茶が回ってきたら飲んでしまって、気がついたらあと一人残っていた。これはまずいっていうんで一生懸命一人分ウッと出した。それを隣の人は目を白黒させながら飲んだ。そんなことが伝記に書いてある。

私がこういう話をすると、若い女の子にイヤーって言わせるためにわざと汚い話を選んで、いやらしい先生だなあと思うかもしれないけれども、実はそうじゃなくて、話を聞いているうちにやっぱり良寛さんならこういうことがありそうな人だなと思うでしょう。マイナスのイメージだと思いますか。しかしこれが良寛和尚でない話だったら、身の回りにいる浮浪者か何かが同じことやったら、汚い、目ざわりだから精神病院に入れちゃいなさい、と言うかもしれない。われわれ平凡人の集まりの社会の中では、こういう人たちが目の前に現われたとき、個性と思わないでそれを反社会的だと思ってつぶしてしまうことがたくさんあります。「寛容になれ、寛容になれ」とよく言いますけれども、寛容になるということはなかなか

むずかしいことなんですね。

話がリズムに関する話でなくなっちゃったようです。リズムの話にもどりましょう。人を説得するときにもう一つ考えなければならないのはリズムを作るための間というものです。あるとき母親がやって来て「うちの子供は全然しゃべらなくなっちゃった。先生、自閉症ではありませんか」という。「どうなんですか、日常生活は」というと日常生活はまあまあなんですね。「顔つきはどうですか、ふてくされていますか」。「いいえニコニコしています」。これはどうもおかしいなと思って呼んで来なさいと言った。自閉症と言われたから、小さな子供だと思っていた。お母さんが連れて来たときにドアのところで「ノンちゃん、ノンちゃん」と呼んだから、私はもう幼稚園くらいの子供がやって来るのかと思っていた。そうしたら大学工学部の二年生、一メートル八〇なんで本当にびっくりしました。

私と話をするかなと思って呼んでみると、お母さんがそばにいて「はいしゃべりなさい、ホラ、きのう言いたいことがあるって言ったでしょう。この先生ひげなんか生やしているけれども優しいのよ、言いたいことたくさんあるんでしょう、話しなさい」と言っている。でも彼は全然話さない。それでお母さんを出したら話した。「君ね、お母さんに対して何か根に持つことあるのかい」。「いいえ、何にもありません。お母さんは少しも私にしゃべらせてくれない、しゃべる時間をくなれいんです」。つまり彼としては「ウン、ウン」と首を振っているだけだから口きかなくなっちゃった。間を取ることができなかったためにしゃべれなくなった。これは実話なんです。私が言うと何か嘘のようだけれども。幾らでもこういう傾向は見つかるのです。

いろんな事件が起こるでしょう。これをなくすにはどうしたらいいかというようなことを言いますが、どうしても論理的に考えることができない。論理的に考えるときに、もう一つ足さなければいけないことは間だと言いましたけれども、間をもう少し拡大して「時間の流れでものを考える」ということを一つ付け加えておきます。論理というのは常に逆転させることができるように思うでしょう。でも逆転しないもの、することのないものがあります。たとえば私たちが「これこれこういう理由でこうやった」と言うとすぐに逆転させて、じゃあその原因を取ればよくなるのではないかと思ってしまう。たいがいこれで失敗するわけです。

あるとき有名な先生が「すべての非行は隠れタバコから始まる」といった。非行青少年を調べたら一〇〇パーセント未成年のうちにタバコを吸っていた。未成年のうちに吸っているタバコをやめさせれば、こういう事件を未然に防ぐことができるというその先生の話をみんな「なるほど」と聞いている。NHKのテレビで私も一緒に座談会に出ていたのですけれども。その先生が言うには「全国のお母さん。子供達がタバコを吸っているのを早く見つけなさい。ポケットにタバコの箱がなかったら、ポケットを裏返して白い紙の上に粉を落して虫眼鏡で見なさい。それでもわからないときには、ポケットをくんくんとにおいをかいでみる。嗅覚は敏感ですからね。そういうふうにタバコを吸っているかどうか確かめて、そしてやめさせるようにしなさい。そうすればこういう忌まわしい事件は起きません」。中学生の殺人事件というのが起きたときですね。

私はそのとき座談会に集まっている中学校の男の先生に聞きまし

た。「ちょっと質問させてもらいます。先生たちは未成年のときに、先生に隠れてタバコを吸ったことはありませんでしたか、正直に答えて下さい」といったら、女の先生は上げませんでしたが、男の先生が三人とも手を上げた。それで私は「逆は必ずしも真ならずということですね。この先生も隠れタバコをしなかったら中学校の先生になれなかったかもしれませんね、先生の論理でいったら」。先生はいやあな顔をして黙りました。

これは、つまり出発点を抑えれば結果は起こらないという論理ですが、そういう論理に私たちはうっかりするとごまかされてしまう。それでもし私がいやみっぽく言わなかったら、全国のお母さんがその日から家に帰って子供のポケットに手を突っ込んで、くんくんやっていたかもしれません。恐しいと思いませんか。テレビの影響で、全国の一千万くらいの人が子供の服に手を入れて、くんくんとやる状況を思い浮かべてごらんなさい。集団の狂気といった方がいいんじゃないか。そうならないようにするにはどうしたらいいかと言ったら、その時に論理を逆転させてみる。初めはそうだけれども、同じ出発点から始めたものはみんな同じところに行くのか。違ったところに行くかもしれないでしょう。私は未成年のときにタバコを吸った先生が生徒のタバコを見つけたときにはやっぱり対応のしかたが違うんだと思うのです。女の先生はいやに厳しかったりするが、男の先生の方はまあおれもやったことがあるからな、というふうな寛容さが少しあって、それが救いになっているわけです。

そういうところをもう少し考えてみると、私は、論理は逆転させてそして人間は時間の中で生きているということを考えてほしいと思います。そういう意味でつい最近、また新しい発見をしたのです。数学では、二十は十よりも十多く、三十は二十よりも十多く、四十は三十より、五十は四十より十多いだけのことだと、思っていた。大体私の言ったことは論理的でしょう。だけれども、人間「人生五十年」という年になろうとしているときに、どういうわけだか一つ一つ数えられなくて、四十七、あと三つと数える。四十八、あと二つ。四十九、あと一つ。五十、あとゼロ。何か三、二、一、〇でロケットになってどこかへ行くような感じがする。「人生五十年」という言葉があったおかげで、私たちは五十という数を四十より十多いとはなかなか受け取れない。これは人間のものさしで、十、百なんというのは算数のものさしになります。これは非人間的なものさし、まったくの抽象のものさしです。私たちにはもっと生きた人間のものさしがある。

論理的にものを考えているときには、自分たちの人間のものさしで測らないで、抽象的な永遠のものさしで測って真理を論じていったりすることになりかねない。私もその中の一人ですけれども、怪しげな論理とごまかしで人を笑わせたり、だましたりすることがあります。しかし、それより、もっともっとひどい人たちがいますから、注意して話を聞くようにして下さい。じゃ、このへんで……。

（第十六回文芸学会の講演から。速記・村松真理子＝第十五期卒業）